

古代イランの女神、スィムルグ

— 現代社会に生かせる文化モデルの構築に向けて—

Simurgh, the Ancient Iranian Goddess

—toward making a new cultural model—

Jamshid Jamshidi M.D., Ph.D.

初めに 古代神話が各社会の意識または文化の土台をつくり、社会組織の進化に伴い宗教が形成され、やがて合理性ロゴスが出現すると専門家は見ている。ドイツ心理学者ユングが結論したように文化の基礎を作る神話の影響が普遍意識として無意識領域または意識領域に永遠に残存し、絶えず人の心理に作用する。私たちの心の奥深くに今なお潜んでいる神話的な元型信仰を読みなおし、その秘密の再発見に努力しなければならないという時代の要求を痛感するものである。現代のイラン社会によりふさわしい文化の構築の課題を考える際、今こそもう一度原点に戻り、古代神話の読み残された部分または多いに考えられる歪められた部分を発見し、本来の秘密を検証し、近代的な解釈論を応用した上、現代社会に役立つモデルの構築を試み、ここで紹介したいと思う。

古代神話の近代的な読みかた 図1は古代イラン神話における三十の神々を示す。まだほかにも神が存在しているが、日本ほどの八百万（やおよろず）の神は存在しない。曜日を担当する7つの神が月間を担当する12の神に展開するが、これら月間の神がそれぞれ星座（Zodiac）に対応する。最後に日々を担当する30の神が誕生する。注目に値することは後のゾロアスター教の最高神または善の神とされたアフラ・マズダー（Ahura-Mazda=AM）が他の神と同等の木曜のみを担当する神となっていることである。古代における神々の特徴は自由で、多様性に富んだ仲良しの神々であることである。調和を徹底した多様性がやがて深層に存在する統一の根源に統合していく。言い換えれば一者が多者（外向きの方向）になり多者が一者（内向きの方向）になるという神々の互恵的な関係が示されている。古代イランの文化は時代において一者または根源をいろいろ異なった呼び方で表現していた。ズルワン（Zurvan）または無限の時間の神はその一呼称である。古代人が時間を生命あるいは生活と解釈し、神ズルワンを無限の生命の象徴と位置付けていた¹。この神はまさに非二元の神でありゾロアスター教の善と悪の神の父親である。ズルワン神学に代わって、聖鳥スィムルグの概念が登場する。

¹ サンスクリトの Amitahba は無限の時間であり阿弥陀、無量寿の語源でもある。

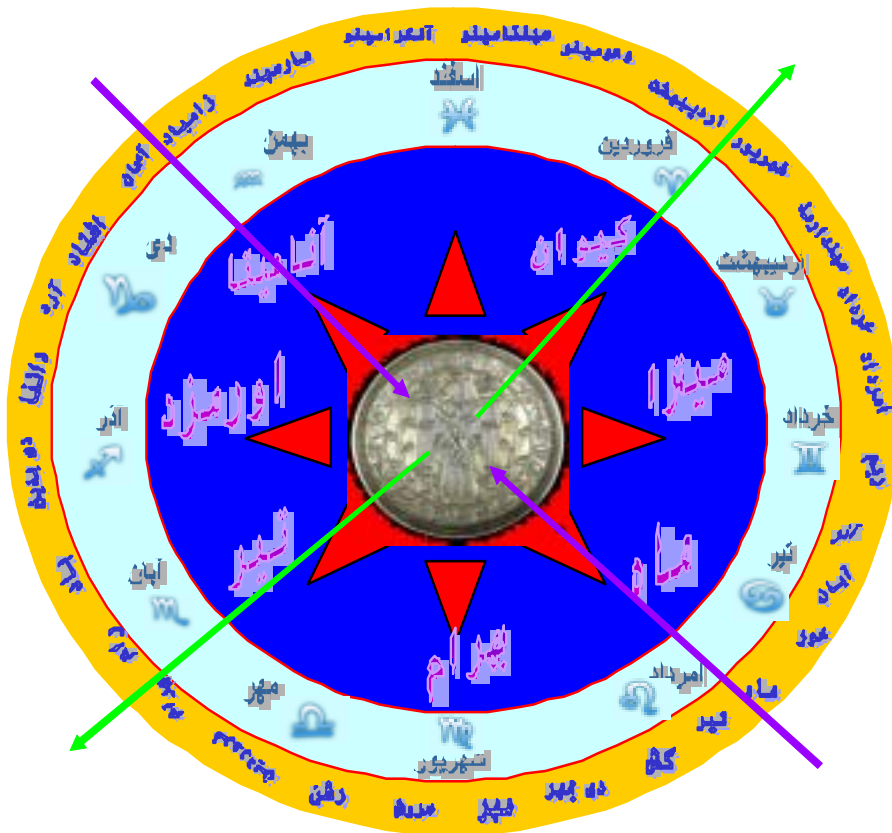


図1 古代イランの神々の組み合わせを示す。根源の神スィムルグから曜日の7神そして月間の12神が発し最後に日々の30神が生まれる。神々と根源神との関係が一方的でなく互恵的なものである。調和を保った多様な神が根源神と一体化する。

スィムルグを一者として宇宙的な展開能力のある聖鳥スィムルグの種子が存在の根源（アルタ＝天則）と考えた。種子が火種やアシ（ヨシ）（ney=reed）などで形態を変えたりするが物質ではなく、創出の源となる一概念に過ぎなかった。または種を **Faravashi**（＝変容）で表現されたりしていた。古代イラン文化では種がほぼ仏教の仏性と同等の意味を持つ。後ほど説明するが根源の種が展開能力を備えたまさに至高神の現れである。神々を含んだすべての現実が種という根源を共有する。

古代イランの神々はあとから出現した宗教文化に含まれていくが、その意義や役割あるいはその自由度に変化が起こる。古代イランの神々を含めた独創的な宗教がゾロアスター教のほかにミトラ教、マニ教そして **Sohrevardi** の神智学が知られている。紙数の関係でここでゾロアスター教のみの主な神

Amshaspandaを紹介する(表1)。ゾロアスター教の原型には**AM**を含んで **AM**と同等な神計七名が知られている。**AM**は**Amshaspanda**を創造した後、自己を創造した。そして彼が仲間に向かって私たちが創造したのは誰なのかとたずねたと記述されている。しかしゾロアスター教では**AM**が全知・全能の創造者の神としてピラミッドの頂点に位置づけられ唯一の正当な**無限の光**となり他の6つの神が**AM**の部下として登場させられた。神々の対等な立場がなくなり神の一方向的な命令がなければ彼らの存在価値もなくなる。

表1 ゾロアスター教に登場するアフラ・マズダ最高神の助手たち(**Amshaspanda**)

守護性	象徴	性別	アベスタ名	ペルシア語
生物	善思考	男性	vohu manah	بهمن -1
大地	美德	女性	spenta armaiti	آرمیتی(اسفند) -2
火	真実	男性	asha vahishta	آشا(اردیبهشت) -3
水	成長	女性	haurvatat	خرداد -4
金属	権力	男性	khshathra vairya	شهریور -5
植物	不死	女性	amaratat	امرداد -6

AMを存在の頂点とした神学、天地誕生論、人間論、生命・生活論等が新たに創案され古代本来の文化概念との異なった性格が強調された。神と人間の統合を失調させ、神をピラミッドの頂点に位置づけ、人間を神の下請け存在としたゾロアスター教の誕生から古代イラン文化のゆがみが始まったと考えられている。

さらにゾロアスター教では**AM**の仲間がすべて**AM**の光を浴びた真の神であり、常にかれらに対抗する悪の神を設定し生命・生活を善一悪の闘いと考え、宗教における二元論の創始者となる。

聖鳥スィムルグの主役 写真1がペルセポリス宮殿の柱の先端に飾られていたいわゆる想像の鳥スィルムルグ(**Simurgh**)と思われる。2500年前のアケメネス朝時代ではスィルムルグが**AM**の象徴と見なされていたが、ゾロアスター教の聖典では**AM**が至高神となりスィモルグはただの幸運の鳥に降格させられた。**AM**が創造した海**Fraxkart**(現カスピ海)に浮かんだ木の上に精霊の鳥**Sae'na**が(ス

ィムルグのことです) 宿った。鳥が木の上に降りると木から無数の種が散って **Tir** 神によって神聖な雨を降らす星 **Tishtry**(シリウス **Sirius**)まで運ばれ、**Tishtry** と結びつくと雨が降り、**Baad(Vayo)**神により遠方に投下させられるというような記述を認める。種も **Tir** 神や **Baad** 神や **Tishtry** の神もすべてスィムルグの側面あるいはそれぞれスィムルグの一顔にすぎなかった。このようにスィムルグと種との関係が立派に残されている。古代ではスィムルグは **Spanta Manu**(種を巻く・増やす神)という意味です。

一方 (**Sae'na**)の外見を鷲や犬やねずみやコウモリや孔雀などと例え、存在を縮小させた。実は古代におけるスィムルグ **Sae'na** はこれら生物の全てでありながら無名・無面の多様性を象徴した願望の至高神の概念に過ぎなかった。



写真1 アケメネス朝時代に建設されたペルセポリス宮殿の柱天辺に飾られたスィムルグの石造彫刻。鷲の顔付とライオンの胴体をした想像の生き物でアフラ・マズダの象徴とされた。

さらに言語学的にはイランのクルド人や トカリ人、ソグド人の言葉では種や種の房そして鳥をほぼ同等の意味で使っていた。

トカリ語では鷲のことを **Va-shi** と言い、クルド語では房(**khoosheh**) を **Voh-shi** という。房の象徴の鳥スィムルグこそが現実誕生の種または根源の木であると見なされていた。しかしスィムルグ概念がササン朝ペルシャ時代におけるゾロアスター教の有力聖職者 (**Mubadan**) により多いに歪曲された。

根源の種に具現化された鳥が神 (**Khoda=Khod=Khayeh**) になる。神が存在の根源である。存在の根源である種フラワシ(**Fravashi=Faravahar**) が自己創

出、自己組織化の能力を有する存在の原動力である。まさにそれは(**Khoda=神**)である。

ペルシャ語では存在は **Hasti** と言い、種 (**hasteh**) の派生語である。または種のことをペルシャ語で **DANEH** とも言う。**DANEH** を発見し探求することを **DANESH** (知識) , **DANAEI** (知性)、そして **DANEH** を理解したものは **DANESHMAND** (有識者=学者) となる。種が神の性格を持ち、神のような振る舞いをし、変容により進化する。種を発見し、育ち、展開させるのは人間の役目と見なされている。

神聖な火種の房を象徴する神 **Azargoshap** の姿を示す (図 2)。ササン朝ペルシャ時代のある拝火殿で発見されていた。九本の火種の松明を体に備えている。存在の根源、火種を守護する神である。住民の全ての火種がこの拝火殿で保管され、消えないように保護されたといわれている。

宇宙論を説いた本 (**Bondahesh**) によると **AM** が天地をベイゼー (睾丸、キンタマ) つまり種から創造したという。または自分の意識や無限の光から火種を起こし火の身体を作り上げた。火の身体の頭から空、足から大地、毛からは植物、左手から神聖な牛、右手からは最初の人間キュマルスを誕生させたといわれている。



図 2 九本の火松明を体に付けた **Azargoshap** 神

天地の誕生とその階層的な構造 古代イランの文化では現実の出現過程を連続したサイクルと考えていた。言いすぎでなければ古代の天地論は進化論に匹敵するモデルではないかと私は思う。一サイクルの現実の誕生が神スィムルグの種から始まり (図 3)、種の神スィムルグに終わる。スィムルグの種によって水が出

現し、水の種により大地が誕生し、大地の種により植物が出現し、植物の種により動物が生まれ、動物の種によって人間が誕生する。古代イラン文化では最初の人間を **Jamshid** と名付けていた。**Jamshid** は自律を主張し、**AM.**の彼の預言者の受け入れ提案を拒否したため大変な眼に遭った有名な神話的な人物です。そして人間の種によって神スィムルグが誕生する。ちなみにペルシャ語で人々を **Mardom** と言い、それは **mar takhom** で自己組織化により展開できる種という意味です。

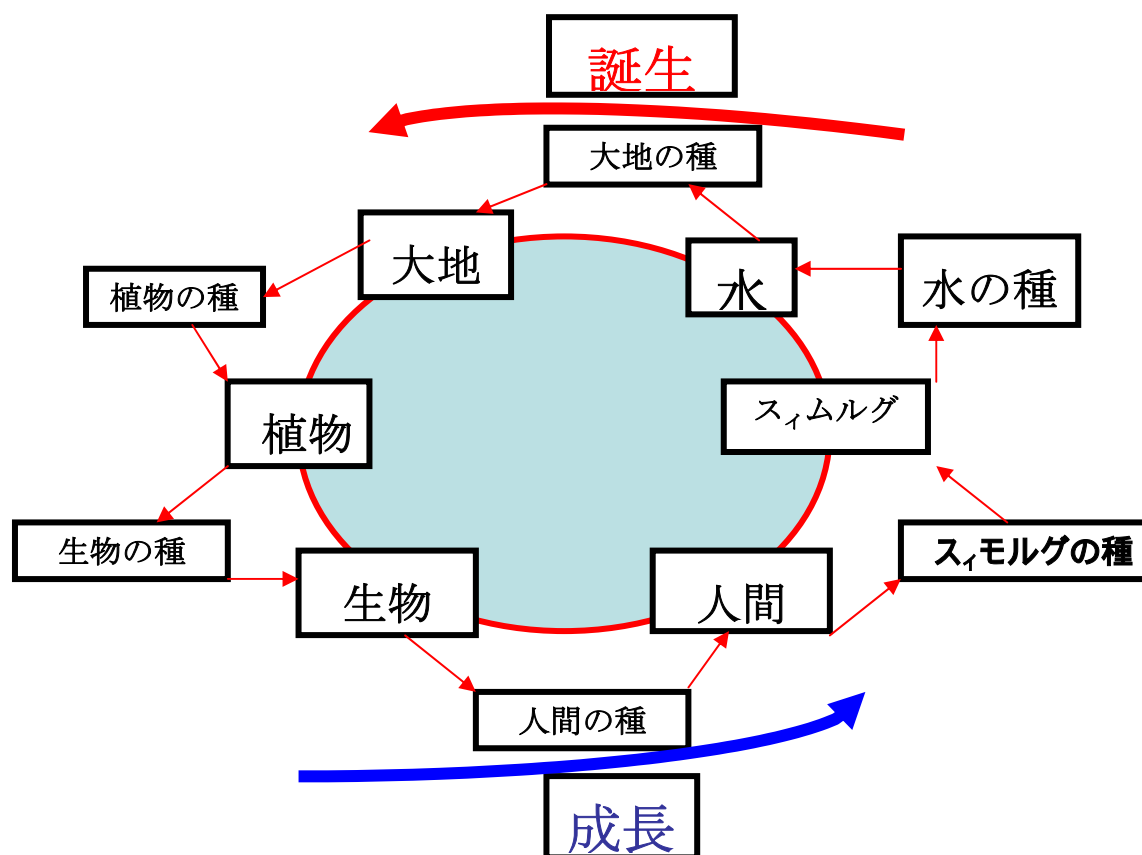


図3 古代イラン人が考えた現実の出現過程の一サイクルを示す。
誕生が単素水から始め人間まで進化し、やがて人間が神を創造する。

古代イラン文化における天地の誕生論には注目し得る二つのポイントが含まれていると考えられる。一方で存在の全てはバラバラではなく連結性を持っているということと、他方で神が人間になり人間が神になるということである。神と人間が相互認知のなかで展開し進化する。いずれの原理も後から展開したゾロアスターに象徴する宗教には生かされていない。文化の主人公である人間の運命を左右する大変基本的な大切な概念だと考えられる。

古代の天地誕生論を少しい違った図式で表すと図4の如くである。高位のレベルが低位のレベルを含んで超える。高位ほど進化したものである。古代イラン文化では展開された天地論の性格が注目に値するものと考えている。低位を壊すと高位が存在できなくなる。単純な物質、水がなくなると生命が危険にさらされる。人間を保護するため生態系を守らなければならない考え方が伺える。しかし高位を壊すと低位は存在を続ける。低位の領域（水、火、土、風の4単素の重要性）が基本的な意義を持っている。天地誕生の過程で生まれた6つの要素を物質、身体、精神三つの要素に簡略できるが、やはり階層原理が有効である。精神性を守るため命を大切にしなければならないということになる。

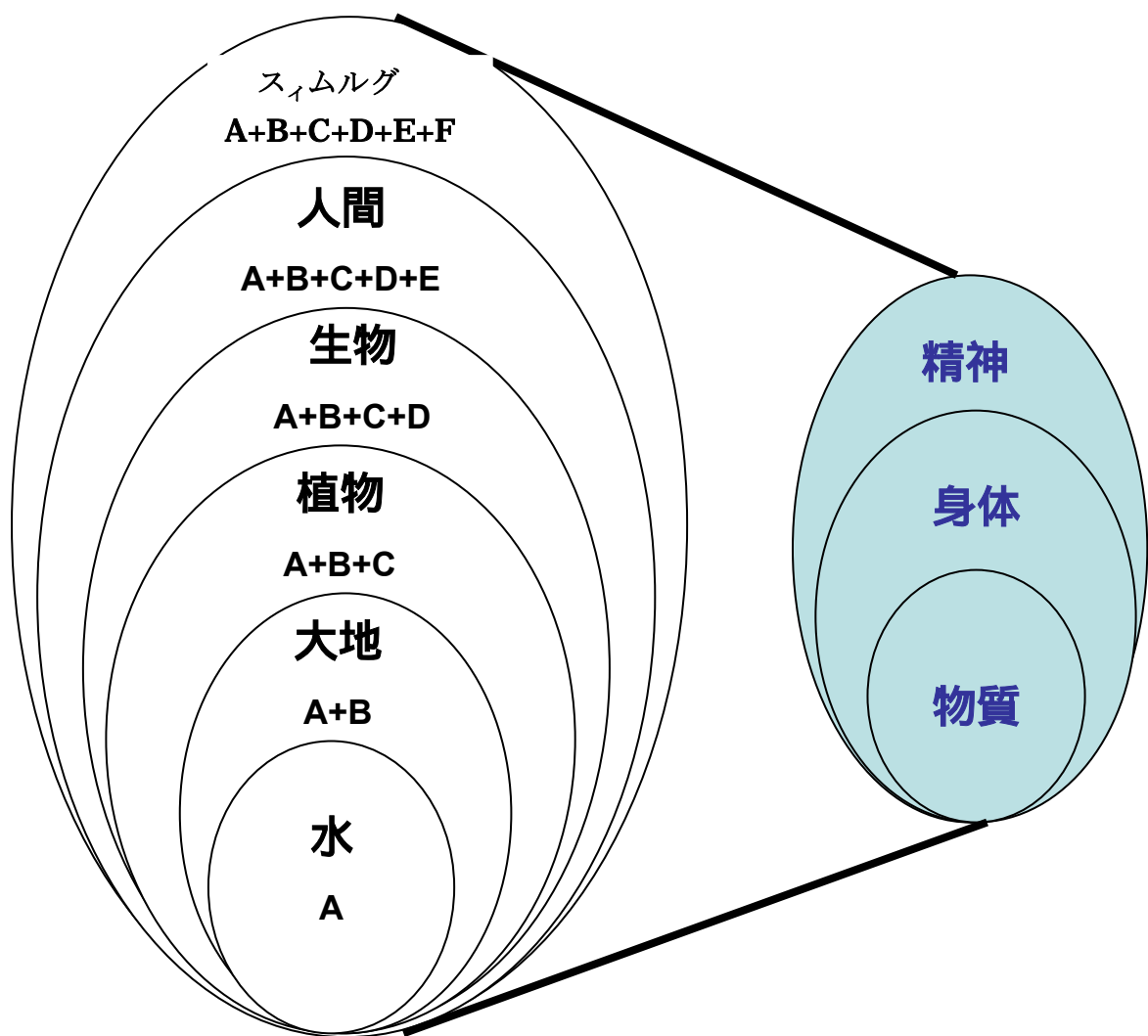


図4 古代人が考えた進化の過程。単素水から人間そして神の出現までの過程が階層的で高位の層が低位の層を含んで超える。右の3層モデルが左の6層モデルを簡略したものである。

表 2 は天地の諸要素が誕生するために必要とする期間を示している。6つの要素が一回完成するまで一年の期間を要する。各要素が必要とする期間が等しくないことに注目してください。完成した各領域の末、イランでは祭が起こされ領域の誕生をお祝いすると同時に次の領域の誕生にエネルギーを供養する意味も含まれていた。

表 2 天地の諸要素とその誕生のために必要とされる期間

天地の諸要素	誕生には必要な期間
バード神またはスィムルグ	40d.(3月21日～4月29日)－Medyozarm
水	55d.(5月5日～6月28日)－Medyoshah
大地	70d.(7月4日～9月11日)－Pedishan
植物	25d.(9月17日～10月11日)－Ayasrim
生物 (Goash=聖牛)	75d.(10月17日～12月30日)－Medyarim
人間 (ジャムシッド)	70d.(1月5日～3月15日)－Hamaspahmedim

面白いことに彼らの考えでは一年間でできた天地が永久的なものではなく、毎年このサイクルが繰り返さなければならなかった。しかしサイクルの繰り返しが二次元的なものではなく三次元的なものでらせん状の性格を持っている。言い換えると天地が年毎に深まって進化する。

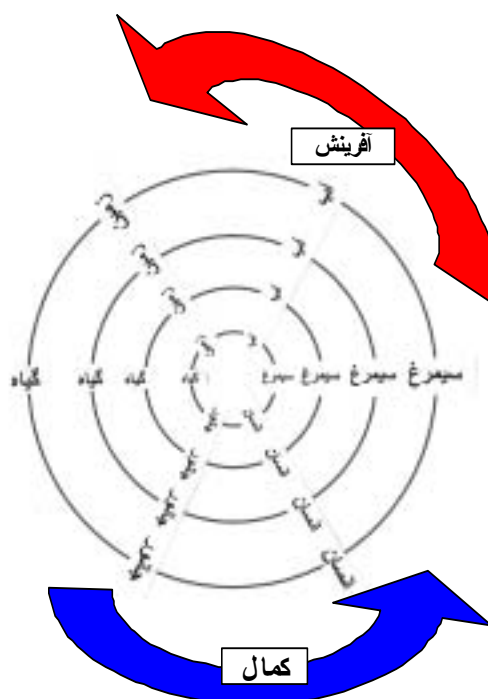


図 5 天地の諸要素が出現のサイクル毎に深まりを増し、進化する。

図5は古代文化が理解した天地の深まりのサイクルを図式的に表している。進化度は内方から外方へ増していく。

古代の天地誕生論が深みまたは三次元的な性格を有したことが理解できます。サイクル毎に各要素が進化する。人間が深まり神スィモルグの概念がより進化する。神と人間が一サイクル毎に相互理解を深め共に立派に成長する。古代文化では決して神と人間が別々の存在として考えられなかった。神と人間が共に生き共に発展する。古代文化における神が人間との付き合い過程でいかに成長し、より至高な地位を占めるようになるか下記の人間に対する神の会話から伺える：

好かれる者であったがあなたが私をより好かれる者に変えた、

美しい者であったがあなたが私をより美しい存在に変えた、

魅力的な者であったがあなたが私をより魅力的な存在に変えた、

至高神であったがあなたが私をより至高的な神に成長させた。

この会話を通じて神が人間との付き合いによってより至高となり、一方人間も神の影響を受け自分の成長を可能にする。

人間の階層構成 古典によるとキュマルス²(**Kaiumers**)の種から生まれた人間は **tan** (身体)、**axw**(命)、**dén**(意識)、**bōy**(感覚)、**zurwan**(こころ)³そして **farawashî**(フラワシ)から構成されている。身体のみ世俗的で他すべてが神聖なもので天から人間の体に付与したものである。フラワシが最も神に近い精神性であり、人間の各部分の調節や調和をもたらす機能を持っている。

人間の死後それぞれの部分は元のところへ旅立つ。言い換えると人間が種から生まれ成長し、やがて枝を発した立派な木になり最終的にフラワシを介して神と一体化し神の進化を促す。多少近代的な解釈を加え図6のように人間の構成部分と階層的な構造関係を紹介する。人間は天地誕生過程における自分以下の低位の要素を含んで越えた進化した要素である。人間の身体が水、大地の成分を含み(人間の死後体が大地に戻る)、そして人間の命が植物・動物の生理機能を受け継いだ。人間の心、知性(**Xerad**)が動物性を含めはるかに超えた独自

² キュマルスはゾロアスター教における最初に生まれた人間とされている。彼がアーリマンに攻撃され殺されるが彼の種から咲いた草が成長し、現人間の両親であるメシーとメシヤーが生まれる。

³ **Aayneh**(鏡)ともいう。「こころ」を鏡に表現した理由は人が死んだ後、人間の「こころ」の部分が太陽に統合するためである。鏡が太陽の象徴とされていた。日本の神道における三神器の中の鏡とほぼ同等の意味を持つと考えられる。

発展させた高次元の能力である。高い精神性、つまりフラワシを持ち合わせた人間こそ神と一体化し、そして新たな神の存在を促す。

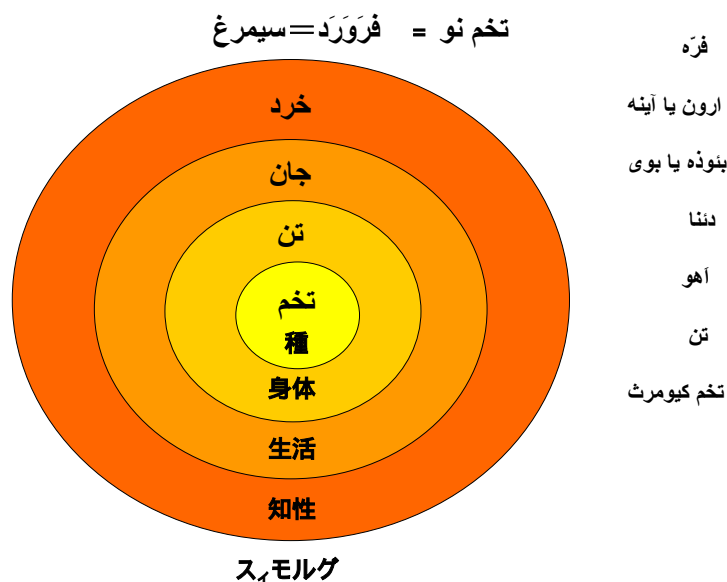


図6 人間の階層的な構成部分

スィムルグ、形而上を超えた神：Partian(アスカ王朝＝安息)時代（紀元前 247～紀元 228）にミトラ教が国家の宗教になり信者が増えるが、逆にゾロアスター教が弾圧を受け信者の数が減少する。

アスカ王朝が滅びた後ササン朝ペルシャ時代(紀元 224～651)に今度はゾロアスター教が盛んになったがスィムルグ文化は消滅していない。ササン朝ペルシャ時代からたくさんのスィムルグのモチーフが残っている。写真2に紹介したこの銀のプレートが大変貴重な文化宝産としてロシアのサントクトペテルブルク (Saint Petersburg) のエルミタージュ美術館で保管されている。お腹の踊り子の身元については意見が一致しないが、娘のラーム (RAM) の説やスィムルグを AM 自身と考えた場合踊り子はその妻ではないかとの説もある。スィムルグが鷲⁴のような顔付をしているが、ぶどう房は彼の象徴または天地の源、宇宙にまき散らす種を印象付ける。中心のスィムルグの娘ラームが裸姿でダンスをしているのは、スィムルグの一側面で愛情、音楽、快樂の象徴でした。ラームの姿から古代の神がいかにか現実的で今を生きる志向をアピールしているかわかるでしょ

⁴ 説によると「IRAN」は「IR-YANE」であり、それは「鷲の家」または「スィムルグの家」という意味である。「IR-」はシュメール語の鷲「IRgoo」から取り、「YANE」はペルシャ語で「家」という意味です。

う。



写真2 スィムルグとお腹の中に裸姿でダンス中の娘を展示するササン朝時代から残った宝の銀のプレート

11 世紀の詩人フェルドウシーのシャー・ナーメ (SHAH-NAAME) にもスィムルグが立派に登場する。スィムルグが雨を降らせる寸前の黒い雲のような姿で現れる。スィムルグと雨の関係がはっきりと描かれている。他にスィムルグが救世主のように登場する意味の深い古代地の有力者サーム (Saum) の息子ザール (Zal) の救助の物語がある。ザールが生まれた時、手足や顔が美しかったが、老人のような白髪 (Albino) でした。当時代には王の息子が白髪ということで周囲から大変侮辱と思われたため、サームが息子を鬼に食われるために山奥に捨てる。しかしスィムルグが息子を拾い、山の天辺にある自分の洞窟のところで乳を飲ませ育つ。サームがあとから後悔し息子を捜索する。このごろ息子ザールもすっかり大きくなったので、スィムルグが彼に自分の羽根一本を預け困ったときこれを燃やしたら助けに行くといい彼を親が見つけられるところに放した。スィムルグは最後の別れの時に一言、「生活経験から学べ」と言い残した。

古代文化におけるスィムルグの最後の一言は大変重く受けとめられている。ピラミドの頂点から命令を発し、生き物の運命を定める後発の宗教における神と違って人間に自分の運命を「生活経験から学べ」と自分で決めろと教える。一

種の世俗的な生き方を教えていると聞こえる。

スィムルグの最も近代的な概念が 12 世紀の詩人アッタル(Attar)の **Mantheql Tair** (鳥たちの会議) の中で紹介されている。簡単に紹介すると、街中の鳥たちがある日自分らの指導者あるいは王様を探しに旅立つ。空、陸、海をいくら探しても自分の思った指導者を見つからない。旅が長く続くにつれ鳥が疲れきって次ぎから次と脱落し、数が減っていく。最後に残った 30 羽の鳥たちが会議をした結果、自分らの外には指導者あるいは王様なんかは存在しない、私たちが結集し団結すれば皆自らの王様であり自分らを指導できるものだ。

30 羽の鳥は日々の 30 の神々に対応し、30 という数字が多様性を表し、スィムルグがこの多様性の統一の象徴である (写真 3)。つまりこの話は連鎖の「多様性—調和—統一」の概念を極める。



写真 3 色彩の異なった 30 羽の飛ぶ鳥がスィムルグの姿を形成した。
スィムルグは鳥たちの多様性と調和の結果で、統一の象徴となっている。

最後に：神話は古代社会における人々の生活体験から取得された素直な結果であると考えられる。原始の社会生活にとって必要不可欠な知恵でもあったでしょう。神話をそのまま現代社会に応用することは無理がある。一方神話が人間意識の進化過程における人間社会の普遍的な文化財産であり、軽視し、あるいは否定することは文化発展にとって大きな損を被るものとなる。イランの現代社会にスィムルグは、その隠された意味的内面に触れられずに無意識的にあらゆる

るところに登場している。トーナメントのトロフィに、コインのデザインに、曲名に、文学作品に、航空会社のロゴに、店の名前に、イベントのキャッチフレーズなどなどがその例です。私はスィムルグ文化概念を立て直すことにより、無意識領域の存在を意識領域に引き上げれば十分現代社会に一貢献できるものと信じ、この研究に至った。

文献

1. アーヴィン・ラズロ：カオスポイント—持続可能な世界のための選択、日本教文社
2. ユング心理学入門—河合隼雄、培風館 2000
3. بُندَهش- فرنېغ دادگي؛ گزارنده مهرداد بهار،- تهران: چاپ سوم 1385
4. مجموعه قوانین زرتشت- یا وندیدا اوستا، تالیف جیمس دارمستتر؛ ترجمه موسی جوان- تهران: دنیای کتاب، 1382
5. زروان- در اصل ایزد سیمرغ سیمای بومیان دیرین فلات ایران بوده است، جواد مفرد؛
<http://www.akhbar-rooz.com/article.jsp?essayId=17176>
6. Iranian SIMORGH, by Hanns-Peter Schmidt, December 2002:
http://www.cais_soas.com/CAIS/Mythology/simorgh_senmurv.html
7. زال زر یا زرتشت (دفتر سوم)- چرا زال زر به آواز سیمرغ سخن میگفت؟؛ منوچهر جمالی، چاپخانه گردون، برلین 2007
8. رستاخیز سیمرغ- منوچهر جمالی، چاپ کورمالی 1997 لندن
9. پژوهشی در اساطیر ایران- مهرداد بهار؛ موسسه انتشارات آگاه
10. SHAH=NAAME OF FERDOWSI(The Epic of Kings)-Translated by Helen Zimmern:
<http://www.irantarikh.com>
11. Attar, Farid ud-Din. The Conference of the Birds, Penguin Books, 1984